

令和 3 年 6 月 25 日現在

機関番号：32623
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2017～2020
 課題番号：17K02984
 研究課題名（和文）異文化間コミュニケーションにおける共感：日本語母語話者と英語母語話者の会話の分析

研究課題名（英文）Empathy in Intercultural Communication: A Study of Conversations Between and Among Japanese and English Speakers

研究代表者
 山本 綾（YAMAMOTO, Aya）
 昭和女子大学・国際学部・准教授

研究者番号：10376999
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、他者の心情や意図を推測し理解・共有あるいは同期するふるまいを共感ととらえ、日本語と英語の会話における共感の達成について調査した。雑談会話を収録・文字化して会話データベースを構築し、これと併せて話しことばコーパスも資料として用い、談話分析と会話分析の方法を援用して量的・質的調査を行った。調査の結果、日本語母語話者と英語母語話者が共感を示す・引き出す場面で用いる言語形式と方略、その場面の談話構造と相互行為の様相について明らかになった。また、日本語母語話者が英語で会話をする際の特徴や課題についても示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

共感とは、他者と親密さを深めたり、共生・互恵的な関係を築いたりするうえで重要な役割を担うとされる。共感の達成を支える言語行動を実際の会話の観察・記述を通して探究した点に、本研究の学術的意義があると考えられる。

また、本研究では日本語・英語母語話者による共感の事例を蓄積するとともに、両者の相違を実証的に示した。得られた知見は、教材などの開発に応用可能である。英語教育や異文化理解教育への貢献が期待できる点に、社会的意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：This research project aims to explore how empathy is achieved in conversations between and among Japanese and English speakers. Quantitative and qualitative analyses of dyadic and small-group conversations identified the linguistic properties and interactional practices that the speakers used to convey and induce empathy in Japanese and English. The results also illustrated the challenges that Japanese speakers faced when communicating in English. The findings of this study will help develop teaching materials which assist in improving the English language skills needed to build intimate or collaborative interpersonal relationships.

研究分野：談話分析、会話分析、語用論、英語教育

キーワード：共感 日本語母語話者 英語母語話者 相互行為 談話分析 語用論 異文化間コミュニケーション 接触場面

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

私たちは、しばしば他者に対して共感を覚える。共感とは、他者の心の状態を推測して理解し、さらにその状態を共有する、あるいはその状態に同期する、という心の働きとされる(梅田, 2014)。共感とは、他者と親密さを深め、共生・互恵的な集団を作るうえで重要な役割を担う(Tomasello, 2009)。

共感とは日常生活の中で普遍的に見られる現象であるが、ことばを用いて他者に共感を伝えたり、他者から共感を引き出したりすることは、実は単純な営みではない。共感とは、文脈や会話参加者間の関係などによって、そのつど違ったやり方で達成されるからである。さらに、自身と会話の相手を取り巻く社会・文化的規範や慣習などについての知識も必要となる。よって、母語や文化が異なる人との会話では、共感し合うことはより困難であると考えられる。

グローバル化が進む現在、様々な言語・文化が入り混じる環境での相互理解や共生の難しさが課題となっている。この課題に対応する方法の一つとして、言語・文化的背景が異なる人々と積極的につながり協働できる力を養成することが挙げられる(文部科学省, 2013)。そうした力を養成する教育を行うには、教材や教育プログラムを開発し整備していくことが欠かせない。教材・プログラムの開発や整備に実証的研究を通して貢献するために、共感に焦点をあてて日本語母語話者と英語母語話者による言語行動を調査するという構想に至った。

2. 研究の目的

本研究では日本語母語話者および英語母語話者を対象として、会話において他者に共感を示したり他者から共感を引き出したりする場面のやりとりを分析する。分析を通して日・英語者の特徴を探り、両者の相違を明らかにする。また、日本語母語話者を対象とする英語教材の開発を視野に入れながら、考察する。

これらの目的を達成するために、以下の2つの目標を設定した。

- (1) 日本語母語話者および英語母語話者による会話を収録し、発話を文字化し、身振りなどの非言語情報についての記述も加えて、会話データベースを構築する
- (2) 日本語母語話者と英語母語話者それぞれが共感を示す・引き出す場面で用いる言語形式や方略、談話の構造について調査するとともに、会話参加者間の相互行為を観察し記述する

3. 研究の方法

上記2. 研究の目的(1)(2)それぞれについて、以下の方法を用いた。

(1) 会話の収録とデータベース化

本研究では、会話参加者の自然な情緒的反応と発話を分析するために、できるだけ日常的な環境で雑談を収録することとした。日本語母語話者と英語母語話者を対象として協力者を募り、2名1組のペアもしくは3、4名からなる小集団に振り分けた。話題や役割を特に定めずに会話を行ってもらい、その模様を録音・録画機材を用いて収録した。

収録した音声・映像記録は、会話分析で用いられている文字化の原則(transcription convention)を援用して書き起こし、コーディングや量的分析が行いやすいように電子テキスト化した。

(2) 共感場面のやりとりの分析

【資料】

上記(1)に加え、①本研究代表者がこれまでに収録し構築してきた日本語・英語の会話データベース、②既製の話しことばコーパスも資料として用いることとした。(1)を完成させてから(2)の分析に着手するのでは時間がかかりすぎ、研究の進捗が遅れるおそれがあると判断したためである。

①は、過去に採択された科学研究費補助金研究課題(JSPS 23720284、26770191)を通して収録した、雑談会話である。②は、『The NICT JLE Corpus』である。日本語母語話者と英語母語話者それぞれによる、英語のペア会話が収録されている。その中から、主張や立場が対立する相手を説得する設定で行われたロールプレイを用いた。

資料の構成は次の表の通りである。日本語母語話者間(使用言語:日本語)、英語母語話者間(使用言語:英語)、日本語母語話者と英語母語話者間(使用言語:英語)の3通りが含まれる。

表 本研究で用いた会話資料

	日本語母語話者間 @日本語 (ペア・小集団)	英語母語話者間 @英語 (ペア)	日本語母語話者-英語母語話者間 @英語 (ペア・小集団)
雑談	✓		✓
ロールプレイ		✓	✓

【方法】

共感を示す・引き出す場面の事例を抽出し、日本語母語話者と英語母語話者の言語行動を量と質の両面から検討した。観点は、言語形式、方略、談話構造、会話参加者間の相互行為の4つである。言語形式、方略、談話構造については主に談話分析、会話参加者間の相互行為については会話分析の方法を援用している。

4. 研究成果

上記2. 研究の目的で示した(1)(2)について、以下の成果を得た。

(1) 会話の収録とデータベース化

日本語母語話者と英語母語話者(いずれも全員10代後半から20代前半・女性)の協力を得て、次の2種類の会話を収録した。

- ・日本語母語話者間の雑談(使用言語は日本語):13組、合計約260分間(約20分間/組)
- ・日本語母語話者と英語母語話者の間の雑談(使用言語は英語):4組、合計約120分間(約20分間から40分間/組)

会話の音声・映像記録は、上記3. 研究の方法(1)で示した方法で文字化したうえで、過去に収録した会話資料①と共通の書式に則ってデータベース化した。

(2) 共感場面のやりとりの分析

主な調査結果と考察は以下の通りである。

【言語形式】

- ① 日本語の雑談において、日本語母語話者は動詞「わかる」を頻繁に、また応答詞のように用いていた(例。「もっと余裕もって行動すればいいじゃんって、思って。」「わかるわかる。」)。「わかる」は、話し手に話を続けるよう促したり、自身と話し手の同一性を際立たせ一体感を導いたりする働きを担っていた。
- ② 英語で相手を説得するロールプレイにおいて、日本語母語話者は *I know* を頻繁かつ応答詞のように用いていた。この傾向は、英語スピーキング能力が初中級から中級レベルで顕著に見られた。英語母語話者は、*I know* よりも *I understand, (You're) right* を用いていた。

考察: 日本語母語話者が英語で会話を行う際に、日本語の「わかる」からの転移が生じていると見られる。また、日本語母語話者にとって、思考や認識を表す動詞 *know* と *understand* を会話で適切に使い分けることは容易ではないと言える。

【方略】

- ③ 英語で相手を説得するロールプレイにおいて、日本語母語話者が用いる方略として「自他の立場を置き換えて考えるよう訴える」「脅す」などが見られた。英語母語話者が用いる方略としては、「相手の利益や立場を尊重する」「良心に働きかける」などが見られた。
- ④ ロールプレイの中で頼み事をして断られたときに、日本語母語話者は質問を返すことがあった(例。 *How can I do?*)。質問は必ずしも回答を求めているわけではなく、不満や困惑を表していた。また、責任の所在を追及したり、詳しい説明を求めたりすることもあった。英語母語話者は、法や契約を根拠に挙げながら、頼み事を正当化する傾向が見られた。

考察: 会話の相手を説得しようとするとき、日本語母語話者と英語母語話者は異なる方略を用いる。両者の方略の違いの背景には、社会・文化的な規範の違いがあると考えられる。

【談話構造】

- ⑤ 日本語母語話者-英語母語話者間の英語の雑談において、日・英話者ともに *Do you know X?* という構文をしばしば用いていた。*Do you know X?* 構文は、会話の相手にとってなじみが薄そうな物事について語ったり、難解だと思われる語彙を用いたりするときに現れていた。

考察: 一般に、会話参加者の間に共通の基盤が存在するか、お互いに知識の状態を把握できていると、会話を円滑に進めやすい。会話の相手に *Do you know X?* と問いかけることで、共通基盤を築く・知識状態を把握する→導入する→展開する、という一連の流れが生み出される。

【相互行為】

- ⑥ 英語で相手を説得するロールプレイにおいて、日本語母語話者は、笑いを誘うような発話の直後だけでなく、頼み事を断られた直後や同意が得られなかった直後にも笑うことが観察された。

考察: 笑いの意味づけや解釈は、文脈や文化、会話参加者間の関係などによって異なるとされる。日本語母語話者の笑いのタイミングは、英語母語話者に不可解な印象を与えるおそれがある。

- ⑦ 日本語母語話者-英語母語話者間の英語の雑談において、日本語へのコードスイッチング(言語の切り替え)がたびたび観察された。コードスイッチングが起こりやすい場面の一つとして、感想や評価を述べる場面が挙げられる(例。「いいね」「すごい」)。

考察: 自身の思考や認識、判断などを他者に伝えようとするときに、母語でしか表現できないことがある。また、感情が激しく揺れ動いたときに、意図せず母語で発話することもあるだろう。主観的な価値判断やとっさの心の動きを、母語・文化が異なる人との間でどのように伝え合うことができるだろうか。この問いについて、新たな科学研究費補助金の助成(JSPS21K00658)を受けて、今後探究していく予定である。

引用文献

文部科学省(2013)。「第二期教育振興基本計画(本文)」, http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/1336379.htm (2016.10.14 参照)。

Tomasello, M. (2009). *Why We Cooperate*. MIT Press.

梅田聡(2014)。「共感の科学—認知神経科学からのアプローチ」。梅田聡(編著), 『共感』, pp. 1-29, 岩波書店。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山本 綾	4. 巻 -
2. 論文標題 応答としての「わかる」 相互行為と会話の展開に焦点を当てて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 NINJAL国際シンポジウム第11回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ11）予稿集	6. 最初と最後の頁 72-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本 綾	4. 巻 -
2. 論文標題 英語母語話者と日本人英語学習者の要求談話の対照分析 返金、返品・交換をめぐるロールプレイを資料として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語用論学会第21回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 145-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本 綾	4. 巻 1
2. 論文標題 説得の方略としての理解と共感 英語母語話者と日本人英語学習者の談話の分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JAAL in JACET Proceedings	6. 最初と最後の頁 30-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本 綾	4. 巻 -
2. 論文標題 問題解決に非協力的な相手を説得する 英語母語話者と学習者の話しことばコーパスの分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会言語科学会第41回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本 綾	4. 巻 924
2. 論文標題 日本語母語話者 - 英語母語話者間の初対面会話における関係性の構築と交渉 English, Japan, Japanese をめぐる相互行為の分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 10-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本 綾	4. 巻 -
2. 論文標題 英語母語話者と日本語母語話者の初対面会話にみられる "Do you know ~?": 知識についての相互行為の分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語用論学会第19回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 171-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 山本 綾
2. 発表標題 日本人英語学習者のコードスイッチング 英語母語話者を交えた小集団会話の質的分析
3. 学会等名 大学英語教育学会第60回記念国際大会 *採択決定* (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山本 綾
2. 発表標題 応答としての「わかる」 相互行為と会話の展開に焦点をあてて
3. 学会等名 NINJAL国際シンポジウム第11回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ11) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本 綾
2. 発表標題 日英女子大学生によるグループ会話に見られる“私たち性”
3. 学会等名 第4回日英インタラクシヨン研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本 綾
2. 発表標題 英語母語話者と日本人英語学習者による理解の表明 “I know”か“I understand”か
3. 学会等名 対照言語行動学研究会第18回 研究会「言語行動における認識と理解 聞き手はどう理解/共感するか」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本 綾
2. 発表標題 説得の方略としての理解と共感 英語母語話者と日本人英語学習者の談話の分析
3. 学会等名 第1回JAAL in JACET 学術交流集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本 綾
2. 発表標題 英語母語話者と日本人英語学習者の要求談話の対照分析 返金、返品・交換をめぐるロールプレイを資料として
3. 学会等名 日本語用論学会第21回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本 綾
2. 発表標題 問題解決に非協力的な相手を説得する 英語母語話者と学習者の話しことばコーパスの分析
3. 学会等名 社会言語科学会第41回大会大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関